

「詩文と芸術における東西の対話」

Dialogue between East and West in Poetry and Art,

Reconsidering its Possibilities from a Global Perspective,

Nichibunken. Oct.09, 2023 46

稲 賀 繁 美

表記の英語による会議が、日文研と嶺南大学環球中国文化高等研究院 (AIGCS) との共同主催により、開催された。¹⁾ 作業言語は英語。当日、コメントーターを拝命した参加観衆のひとりとして、以下、その場での発言を要約しつつ、私見を開陳させて頂きたい。

1.

初期の日本学者、とりわけ中国と日本美術研究の草分け、アーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 一八五三—一九〇八) には遺稿「詩の媒体としての中国の書体文字」が知られる。それは詩人エズラ・パウンド (Ezra Pound, 一八八五—一九七二) の校訂を経て一九一八年に公刊され、ヴォーティシズムと呼ばれる現代詩の展開に寄与した。この冊子はその後フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 一九三〇—二〇〇四) が注目したことで、再評価もされたが、イエール大学に残されたフェノロサの遺稿にパウンドの書き込みのある草稿は、比較文学者ホーン・ソージー (Haun Saussy, 一九六〇—) らによって詳細な翻刻がなされ、

自ら「無知」を標榜して憚らなかつたパウンドがどのようにフェノロサを「誤解」したかにとどまらず、「誤解」ゆえの詩的可能性へも論究がなされてきた。

中国嶺南大学 AIGCS 院長の蔡宗齊 (Cai Zongqi) 先生は、六朝詩文を中心とした業績で英語圏でも知られる碩学。「アーネスト・フェノロサとエズラ・パウンド・漢字および西洋と中国詩文の再発明」を表題に蔡教授は、本件につき独自の解釈を提案された。簡単に言うならフェノロサは森槐南の文字学を下敷きにしており、後漢時代の儒学者許慎 (Xu Shen, 五八?—?) の『説文解字』(最古の部首別漢字字典) に依拠して「表意文字」としての漢字を西洋の読者聴衆に説明している。フェノロサが西欧では未知の文字体系への案内役として、読者聴衆の関心を引きやすい事例を選んだなら、漢字については初学者でしかないイマジストの詩人のパウンドが、そこから創作への緒となる局面をいわば誇張して展開したとしても、不思議ではない。勢い、表意文字として部首の組み合わせから意味が出現する事例に注目が集中し、あたかも漢字すべてがこの原則で構成されているかの印象を与えたきらいもある。蔡先生は、ふたりの漢字読解の扱いを比較し、フェノロサが文字の連結による詩や文の通常の解釈に重きをおいたのに比べて、パウンドは個々の漢字の原義に拘り、そこから独自の、いわば特異な表現やイメージの出現を見極め、統辞を離れた創造的な解釈へと逸脱する傾向を見せている、と指摘した。

この発表に対して本稿筆者は討論において森槐南 (一八六三—一九一一) と正確に同時代人だった天心・岡倉覚三 (一八六三—一九一三) を取り上げた。というのも、覚三は英文著書『茶の本』で『道德経』の一部を英訳しているからだ。その際に覚三はポール・ケイラス (Paul Carus, 一八五二—一九一九) による漢英併記の訳本を利用している。この英訳書の下訳は大拙となる以前の鈴木貞太郎 (一八七〇—一九六六) によるものと推測されるが、岡倉は原典の漢字に照

らしてその直訳調の英文の訳語を入れかえ、より壮大な宇宙観を巧みに伝える語彙を選び、また生々流転といった状況をより鮮明にするように改変している。これは筆者が一〇年ほどまえに発見した事実だが、とすれば、ここにはパウンドの「逸脱」とは方向は逆向きながら、ほぼ平行した営みを観察できることになる。

パウンド同様に、漢字の「象形」「会意」に重きをおいた説明のお陰で漢字の宇宙への開眼を果たした事例に、ローレンス・ヴァン・デル・ポスト (Laurens Jan van der Post, 一九〇六—一九九六) がある。晩年の半自伝 *Yet Bring Someone Other* に綴られた南アフリカから日本への「カナダ丸」による航海途上で、日本人のパーサーから伝授された知識として語られる。だが実際には、パウンド経由の説明にも負っているもの、と筆者は推定している。⁴ 実際そこには、木々の間から日が登る方向が東だ、といった説明や、窓とは家に穿たれた穴を通して心が通うことだ、といった「象形」由来の(あるいは創作的な)漢字解釈が見られるからだ。さらにこの半自伝の題名はパウンドとも近い位置にあった T. S. エリオット (Thomas S. Eliot, 一八八八—一九六五) の詩集から取られており、ポスト自身、ブルムズベリー・グループと親交があった。このように欧米人が漢字へと関心を抱く際には、その興味をひくような「象形」「会意」の作字に注目が集まりがちとなる。その傾向を蔡先生はフランス語圏ではフランソワ・チャン (François Cheng, 程抱一、一九二九—) に確認した。筆者として補足するならば、程抱一は罗兰・バルト (Roland Barthes, 一九一五—一九八〇) などの仲間であり、構造主義の申し子として、理論的説明に適した用例を好んで解説した面も否定できない。娘のアンヌ・チャン (Anne Cheng, 一九五五—) はコレージュ・ド・フランス教授に出世し、中国哲学のフランス語圏での受容に貢献したが、それと対比すべき事例がフランソワ・ジュリアン (François Jullien,

一九五一」) だろう。

『文心雕龍』の研究で博士号を取得したジュリアンは、西欧哲学と中国思想との異質性を強調することから自らの思索を展開しようとする傾向が強い。その「西洋中心主義」を正面から論難する識者としては、ジャン・フランソワ・ビルテール (Jean François Billeter, 一九三九-) が著名だが、西アフリカのマリで、ジュリアン当人と論戦を交えた経験もある筆者の見立てとしては、彼は文献学者というよりは、むしろ西洋古典学を基礎とした哲学者、啓蒙の文筆家、華麗多産な作家とみなすべきだろう。西洋哲学を中国という「外」から吟味し、それを根底から相対化するために、中国古典を縦横に引用するが、得てしてその出典は不確かで、解釈も正統を逸脱する傾向が目立ち、原典の時代や社会状況も無視して論拠に動員し、論者の議論に縦横無尽に、あるいは手前勝手に用立てる論法であることは否定しがたい。だがその業績は(台湾を含む)中国語圏にも盛んに逆翻訳されて話題を呼び、無視できない学術的評価を得ている。

本家中国の学統に忠実な訓詁学では、かえって中国で改めて注目される可能性は低いだろう。むしろ中国の古典を論拠に、西洋哲学の常識を問い直すジュリアンの姿勢が中国本土で歓迎される事態も、不思議ではない。その彼が彫琢した概念のひとつに *dé-coïncidence* がある。筆者も同様の提案をした(がまったく注目を浴びないままの)経験を持つが、現象として比較可能な事態の裏で、その「趨勢」、ヴェクトルは実は正反対で交差が発生する事件が、とりわけ東西の文化接触では頻発する(西洋起源の透視図法や陰影法などの中・日での受容を筆者が念頭にあることは、以下に触れる)。彼の著作のひとつに、ほかならぬ「勢」を主題とした『勢効力の歴史―中国文化横断』が知られる⁵⁾。蔡先生が、漢詩の翻訳において字義の「勢」を生かした解釈の重要性を説かれたので、思わずこのジュリアンの著作が脳裏に点滅した次第である。

2.

続く発表では、サンフランシスコ大学のステファン・J・ロディイ (Stephane J. Roddy) が、六〇年代の北米西海岸での禅ブーム、カウンセラー・カルチャーのカリスマ的指導者だったアラン・ワッツ (Alan Watts, 一九一五—一九七三) を取り上げた。論題は「東西の対話におけるアラン・ワッツ：浅薄な好事家または炯眼の持ち主か」。論者はワッツを論じるのに、冒頭では伝統的東洋学を政治的に批判したパレスティナ出身のエドワード・サイード (Edward Wadi Said, 一九三五—二〇〇三) を引き合いに出し、さらに、これは全く偶然ながら、先に言及されたフランソワ・ジュリアンを特筆大書して称揚し、東西の哲学に横たわる落差 Gap を捉えつつ、そこに迂回路 *Detour* を探る営みの大切さを語った。

その講演を通じて論者はワッツの著書から多数の引用をしつつ、例えば、空想の動物「龍」に、雲のように掴み難く変転極まりない宇宙の生々流転を捉え、「無為」non-action に価値を見出すアラン・ワッツの弁論に、今日なお通用する有効なメッセージを見る。論者は言及されなかったが、本稿筆者がみるところ、まず問題となる「落差」gap はプラトンの「コーラ」に戻る話題であり、オギュスタン・ベルク (Augustin Berque, 一九四二) にジャック・デリダの「コーラ」解釈への批判が知られる。⁽⁶⁾ 次に「東洋哲学」を指定して西洋哲学と対峙させる論法は、晩年の井筒俊彦 (一九一四—一九九三) の構想との対決を要請するだろう。また論者は松尾芭蕉『奥の細道』にも言及されたが、これは例えばコレージュ・ド・フランスで詩学の教授を担当したイヴ・ボンヌフォワ (Yves Bonnefoy, 一九二三—二〇一六) が阿部良雄 (一九三二—二〇〇七) 経由で著書に活用した話題である。⁽⁷⁾

ここでは本稿筆者Ⅱ討論者の発表者への質問に限定したい。まず弟子筋で滞日したゲイ

リー・スナイダー (Gary Snyder, 一九三〇—) や詩人のアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 一九二六—一九九七) が日本でも著名なのに比べて、アラン・ワッツの著書が日本ではほとんど翻訳されていないのは、なぜか。さらにここに見られる議論は、つとに岡倉の『茶の本』や鈴木大拙が『大乘仏教論』といった英語の著作で取り上げた話題だが、かれらはなぜそれらの主著を生前、母語だったはずの日本語で翻訳出版しようとはしなかったのか。そのうえで、学術的になることを嫌ったワッツを学術的に扱うことには、本源的な裏切りがあるのではないか。それこそフランソワ・ジュリアンが中国古典に対して自らが設けるほかない「落差」gapの裏返しなのではないか。畢竟すれば、「東洋」を言挙げし、「代表」representすることは、東洋を裏切る背任を招くほかなく、偽りの東洋こそが西洋への対抗言説を構成する。東洋学者を自認する立場は、いやおうなく、この逆説を、身をもって生き、いわば動物でも鳥でもない蝙蝠の境遇、水中と陸上の間に生息する両生類のような、どっちつかずの疎外を経験する他ないのではないか? 『日本哲学』の英語での集大成を試みた選集としては、ジェームズ・ハイジック (James W. Heisig)、トーマス・カスーリス (Thomas P. Kasulis)、ジョン・C・マラルド (John C. Maraldo) 編の『日本哲学』なども知られるが、⁽⁸⁾こうした英訳編纂物への論者の立場はどうなのか。

講演につづく質疑応答では国際政治学者、サミュエル・P・ハンチントン (Samuel P. Huntington, 一九二七—二〇〇八) の「文明の衝突」に関する二〇年前の予言が、ウクライナ危機、ハマスのイスラエル攻撃に起因するあらたな中東危機、中国の覇権拡大などを通じて、現時点で現実となりつつあると診断する、蔡教授からの発言があった。だが、儒教とイスラームの動向や、ロシアの拡大に東方の脅威を見るハンチントンの図式は、本稿筆者の私見では西欧

に伝統的な東西二元論的世界観の焼き直しではないか。⁹⁾ 蔡先生はフラソワ・ジュリアンにハントンの衣鉢を継ぐ理論家を見出したが、私見ではハントンが北米合衆国保守体制派を代表するのに対して、ジュリアンはコレージュ・ド・フランス教授就任を拒絶された異端の思索者にとどまる。両者を並べるのは、アラン・ワッツとエドワード・サイードを並べるのに劣らず、きわめて恣意的な解釈となるのではあるまいか。

3.

三人目には、アダ・ロンバルディ (Ada Lombardi) が「第二次世界大戦後の新現代芸術表現の誕生における日本の役割」と題した鳥瞰を提示した。*Arte Contemporanea, Oriente/Occidente - dal 1945 ad oggi* (1991) が英語版翻訳でも出版された著者だが、日本語を作業言語とはしておられない。講演では明治以降のイタリアと日本との文化交流を概観したうえ戦後美術に至る話題が扱われた。論者からは言及がなかったため、本稿執筆者が討論の席で言及した案件を若干補っておけば、工部美術学校に招聘されたアントーニオ・フォンタネージ (Antonio Fontanesi, 1818-1882) 周辺については河上眞理の博士論文『工部美術学校の研究』(2011)があり、イタリアに留学した弟子筋、川村清雄 (1852-1934) や長沼守敬 (1867-1942) らについても石井元章に『明治期のイタリア留学』(2017) がある。また造幣局で印刷指導をしたエドゥアルド・キヨッソネ (Eduardo Chiossone, 1833-1898) の浮世絵収集はジェノヴァの美術館に収蔵され、故・近藤映子が目録を作成している。20世紀の未来主義についても、阿部真弓氏ほかイタリア語にも堪能な研究者がある。ファシズム期にも大倉財閥の後ろ盾で横山大観らがローマで展覧会を開催している。論者はこれらを捨象し、

もっぱら第二次世界大戦敗戦後の、具体グループを中心とする欧日の作品相互の影響を図示を交えて論じられたが、この分野ではミン・ティエンポ (Ming Tiampo) の著作が英語圏の基本書に遇されている。⁽¹⁰⁾ 尋ねると論者はこれらの研究についてはまだ情報収集中とのご返答だった。とはいえ具体グループと美術評論家ミッシェル・タピエ (Michel Tapié, 一九〇九—一九八七) との仲介役を担ったのは、日文研元名誉教授・芳賀徹 (一九三一—二〇二〇)。⁽¹¹⁾ この席に出席が叶っていれば、豊富な回想を耳にすることもできたことだろう。

講演をまとめる方法論の提唱で、ロンバルディ氏は、中世からジョットを経てルネサンスに至る西洋絵画の空間把握の展開をモデルに、東西の出会いのうちにあらたな世界美術史を構想する必要を説かれた。古くはピエール・フランカステル (Pierre Francastel, 一九〇〇—一九七〇) の『絵画と社会』(一九五一)に遡る問題意識であり、とりわけ東亜世界がいかにルネサンスの透視図法を消化しつつそれを変貌させたのかの検討は、筆者が学部卒業論文以来、取り組んできた話題に重なる。⁽¹²⁾ それは単純な発展史観、東西融合で片付く問題ではない。西欧側が透視図法からの解放を模索した一九世紀後半の段階で、奇しくも日本趣味・japonisme が流行を見せたが、そこで格好の手本になった北斎漫画の「三つ割の法」などは、透視図法への模倣と接近を試みながら、実際にはその規範から顕著な逸脱を見せていた。つまり、東西は交差したものの、そのヴェクトルは反対方向、同床異夢 (de-coincidence) だったきらいが否定できない。⁽¹³⁾

質疑応答では、具体の最後の生き残りといつてよい松谷武判 (一九三七—) のことを尋ねた。同氏はヴェネチア・ビエンナーレに特別招待されており、主催者側のおひとりであるロンバルディ氏のご配慮だったのかと尋ねたが、直接の面識はおありではなかった。また現代美術を陶磁の世界にまで広げると、ニーノ・カルーソ (Nino Caruso, 一九二八—二〇一七) と日本の関

係も無視できない。質問者（筆者）が「ニーノ」を「カルロ」と間違えたため人物特定に手間取り、また論者も陶藝は専門外らしく、カルーソが頻繁に日本に招待されていた事実にも通じてはおられないように、公式の場での意見交換はやや不調に終わったことが反省材料である。

*

当日は、英語に堪能な大学院学生・留学生をはじめとした参加者から活発な発言があり、議論も盛り上がった。結果論となるが、オンライン配信などあれば、より多くの聴衆が得られたはずである。筆者は正式な登壇者ではなく、あくまで聴衆のひとりとして参加したにとどまるが、最後に総括の挨拶も主催者から依頼された。本来ならば、日文研客員研究員で、このあたりの話題についても詳しい、司会のデンニツァ・ガブラコヴァ（Dennitza Gabrakova）教授が、自ら発言されるに相応しい学識経験者だった。まことに僭越な仕儀に至ったことを、改めて一言お詫びしたい。

三名のご講演からは、詩においても藝術にいても、東西の対話なり交流なりが、行政主導による「国際交流」のごとく予定調和に素直に収まる事業ではないことも、浮き彫りになった。「交流圏」contact zone が流行語だが、その現場では、あるいは利害対立も表面化し、時には葛藤や抗争も発生する。とりわけ学術上の約束事では処理できない政治的な「代表権」問題が、アカデミックな議論の土俵設定に覇権や支配権を行使する。もって教訓としたい。

（京都精華大学特任教授／国際日本文化研究センター名誉教授）

注

- (1) 日文研主催「国際日本文化研究」ワークショップ Nichibunken Global Japanese Studies Workshop
として表記のとおりに開催された。当日のプログラムおよび実施要旨（劉建輝）は日文研広報を
参照されたい。 <https://www.nichibun.ac.jp/topics/news/2023/10/27/s001/>
- (2) Ernest Fenollosa & Ezra Pound, *The Chinese Written Character and Medium for Poetry*, New York:
Fordham University Press, 2008.
- (3) Shigeni Inaga, “Kuki Shüzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki’s Lecture on
Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars”, *Japan Review*, No. 31, International
Research Center for Japanese Studies, 2017, pp. 105–122.
- (4) Shigeni Inaga, “Under the Shadow of Apartheid: Maritime Paths of Transnational Communication”,
XXII Congress of the ICLA, Macau, July 29-August 2, 2019, Panel: Marine Vessel and Roads as
Vehicle of Socialization: Transnational Encounters and Exchanges, in S. Inaga (ed.) *Yearning for
Foreign Cultures* 「ネットワーク型基幹研究プロジェクト 日本関連在外資料調査研究・活用事業
プロジェクト間連携による研究成果活用」報告書 二〇二〇年三月、九五—一〇八頁。
- (5) François Julien, *La Propension des choses. Pour une histoire de l'efficacité en Chine*, Paris: Seuil, 1992
（中島隆博訳、知泉書館、二〇〇四年）
- (6) Augustin Berque, *Écumenisme, introduction à l'étude des milieux humains*, Paris: Belin, 2000.
- (7) Yve Bonnefoy, *L'Arrière-pensée*, Paris: Skira, coll. « Les Sentiers de la création », 1972.
- (8) James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, John C. Maraldo (eds.) *Japanese Philosophy: A Sourcebook* Nanzan
Library of Asian Religion and Culture, 2011.
- (9) Shigeni Inaga, « Images changeantes de l'art japonais : Depuis la vue impressionniste du Japon à la
controverse de l'esthétique orientale (1860–1940) », *JTLA (Journal of the Faculty of Letters, the
University of Tokyo)* Vol. 29/30 (2004/5) 2006, pp. 73–93.

- (10) Ming T'ampo, *Gutai: Decentering Modernism*, Chicago: University of Chicago Press, 2011.
- (11) Michel Tapié & Tore Haga, *Continuité et avant-garde au Japon*, Trino : Edizione d'arte Fratelli Posso, 1961.
- (12) Shigemi Inaga, « La réinterprétation de la perspective linéaire au Japon (1760–1830) et son retour en France (1860–1910) », *Actes de la recherches en sciences sociales*, n 49, 1983, pp. 29–49.
- (13) Shigemi Inaga, "How to Measure 'Unique' or 'Universal'? Comparison in Crisis or Crisis in Comparison," Redakcja Naukowa Beata Kubiak Ho-Chi, Jędrzej Greń ed, *Unique or universal. Japan and its Contribution to World Civilization*, Volume 1. *100 Years of Japanese Studies at the University of Warsaw*, Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego, Warszawa, 2023, Published online, pp. 71–92.